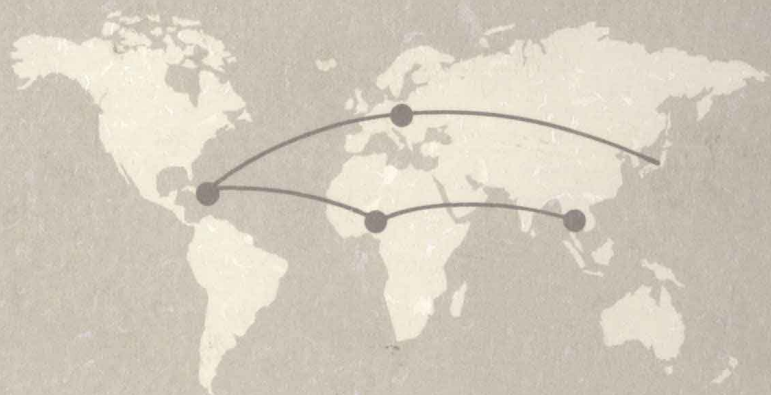


国

境



流

浪

## 国境流浪

---

1990年6月5日 初版第1刷発行

著者———北方謙三+秋山忠右

発行人———下中 弘

発行所———株式会社平凡社

郵便番号 102

東京都千代田区三番町5

振替東京 8-29639

電話東京 03-265-2691(編集)

03-265-0455(営業)

印刷———株式会社東京印書館

製本———株式会社石津製本所

ISBN4-582-82377-7

© Kenzo Kitakata + Tadasuke Akiyama

Printed in Japan 1990

乱丁・落丁のお取替えは直接小社読者サービス係まで  
お送り下さい(送料小社負担)。

# 国境 流浪

北方謙三文 | 写真 秋山忠右

平凡社



# 国境流浪

目次

北方謙三

I部 東西ヨーロッパ流浪——7

II部 カリブの熱と風——63

III部 西アフリカ三都物語——119

IV部 東南亞細亞北垂行——173

## 秋山忠右

- 東西ヨーロッパ一九八七——229
- カリブ一九八八——245
- 西アフリカ一九八九——261
- 東南アジア一九九〇——279

編集  
了  
安中  
彦原  
勝  
博淳



# 一部東西ヨーロッパ流浪



## 東ベルリンのデビッド・ボウイ

### 1 チェック・ポイント・チャーリー

四人の人間が乗ることができる熱気球を作るために、どれほどの布と糸と手間が必要なのか。

布は、少しずつ買い集められた。夜中の数時間が、縫うための時間だった。数年かかって、ようやく気球が完成した。

テスト飛行などはない。風向のいいある夜、気球は四人の男女を乗せて、最初で最後の飛行に飛び立った。

上空は、想像以上に風が強かった。気球は、たちまち方向を失った。数時間後、ある山中に着地した。

右も左もわからぬ漆黒の闇。四人は、肩を抱き合って一カ所にじっとしていた。異変を聞きつけた人々の声。近づいてくる明り。

照らし出された四人は、追いつめられた小動物のようだった。誰何がくり返された。

ようやく、ひとりがふるえる声で言った。

「ここは、西なの？ それとも東？」

西だよ、西の国だ、という答えに、四人は無言でお互いを見つめ合った。涙が、むけられた明りを照り返した。喜びの声があがったのは、しばらく経ってからだった。

東から西への逃亡。

布を少しずつ買い集めたのは、大量に買って怪しまれないためであり、気球を使うことにしたのは、国境地帯に敷設された地雷を避けるためである。

遠い昔の話ではない。つい最近のことだった。

逃亡は、いまでも後を絶たない。東から西への旅行などは、多少は許されているらしい。しかし、家族旅行は駄目である。必ず、東に肉親が残っている。逃げる時は、肉親を引き連れて、なのだ。

国境地帯を逃亡中に銃撃された。地雷に触れた。そんな話はざらにある。河に、屍体が浮いていたり、わずかな持物だけが流れているのが発見されたりするのも、一再ではない。

その国境を、写真家の秋山忠右と私は越えようとしていた。

国境の持つ緊迫を、そこで起きた悲劇を、ほんとうに知ることはできないだろう。所詮、流れ者に似た旅人である。しかし、なにかが写真に写るかもしれない。なにかを肌で感じる

かもしれない。

東欧諸国の国境を、串刺しにするように突っ走り、イタリアへ出、さらにアルプスを越えて西ドイツへ戻ってくるという、いささか無謀な旅のはじまりであった。全行程は、五千キロに達する。

私たちは、西ベルリンのホテルで、今回の旅の友である、ワーゲン・ゴルフ・GTIをピクアップした。

そのゴルフ・GTIのステアリングを握って、いま国境にさしかかりつつある。

「偶然っての、あるもんだよね」

西から東への、はじめての国境を前にした緊迫をやわらげるように、私は言った。すでにビザもすべて揃っている。車の通行証である、グリーンカードと呼ばれるものもある。

「あんなところで、あんなやつに会うなんて思ってもみなかった」

きのうの午後、ベルリン国境の壁沿いを歩いていて、小説家仲間の島田荘司に出会ったのである。お互いに国籍不明だが似たようなやつがいる、と思つて近づいていったら、当人だったのだ。東京でも、滅多に起こることのない偶然である。

壁ごしに眺める国境のむこう側には、人気のない街があった。大きな通りが、壁と緩衝地帯で寸断され、また同じ街並みの通りとなつて続いている。異様な光景というより、現実としてはつきりそこにあつた。言葉を並べるより、むこう側へも行ってみることにした。そう思った。

「この旅も、いろんな偶然があるような気がするな。きのうみたいなさ」

「ケンちゃん、晴れ男だったよな」

秋山は、関係のないことを言った。息苦しい状況になった時、写真家は天候とか光の角度とかに意識を集中して、なんとか自分を保とうとするものらしい。

曇りがちな空である。夕方、といっても午後六時を過ぎたころから、晴れる日が続いているらしい。日没は、九時過ぎというところか。

国境検問所のある通りに入った。

チェック・ポイント・チャリー。

乗用車と指示がある方へ行く。停まる。進む。往来は、かなりあるようだ。西側国境は、なんの問題もなかった。

東側の検問の手前で、ちょっと待たされた。前の車が手間取っている。

「俺たちの旅で、雨に降りこめられて困ったことあったっけ」

ウインドを降ろして空を見あげ、私は言った。前の車は、シートをひっ剝がして車の中を調べられている。

秋山とともに旅の空を仰ぐのは、実に十数年ぶりのことであった。当時彼がコンビを組んでいた佐藤晴雄ともども、日本全国十数カ所を旅したのである。清涼飲料のPR誌の仕事で、私は文章を担当していた。

あのころ、私は世に半歩ほどしか踏み出していない、もの書きの卵だった。発表のあてすらない原稿を、ただ憑かれたように書きまくっていた。野心と絶望がないまぜになった日常からの、あの旅は解放だったのか逃避だったのか。

そしていま、私は膨大な仕事から逃れるように、東への国境を越えようとしている。そばに居るのは、あの秋山忠右である。多少の感傷は、仕方のないところか。

「おい、俺たちの番だよ」

秋山が言った。私はギアをローに入れ、国境警備兵が指示する場所まで、車を進めた。

「日本人か？」

パスポートを出すと、兵士はそう訊いた。無表情である。まずトランクルーム。それから車内の検索だった。窓口のところで、別の兵士が私たちのパスポートと照らし合わせながら書類を作っている。私のニコンも含めると、カメラが四台。観光ビザではまずいとこだ。

兵士がカメラに眼をとめた時は、さすがに無気味だった。

「銃や爆発物の類いはないな？」

一応、訊く決まりになっているのだろう。カメラについてなにも言われなかったことに、私たちはほっとしていた。書類の作成に多少手間だったが、無事通過した。

東ベルリン。広い道に、車は少なかった。人の姿もまばらだ。街角で警備に立っている兵士の姿だけが眼についた。

「まあ、ここはこんなもんだらうな」

秋山が呟いた。AK47。私は、兵士が肩にかけている自動小銃の見当をつけた。

## 2 プランデンブルク門の待人

ホテルにバゲージを放りこむと、すぐに車で街に出た。どの道筋も閑散としている。西ベルリンの喧噪の中からやってきたから、なおさらそう感じるのか。

若い連中を見かけると、一応は手を振ったり笑いかけたりしてみるが、あまり反応は返ってこない。

工場のような建物に、行列ができていた。老若男女とりまぜて、四、五十人というところか。めかしこんでいる。それが一層、周囲の暗鬱さを際立たせていた。

秋山が、早速カメラを取り出す。人間探党派と言ってもいい写真家である。彼がシャッターを切っている間、私はそれがなんの行列なのか確かめた。ようやくわかったのは、ダンスをするらしいということである。そうやって、見知らぬ男女が知り合いになる。ふと、ニューヨークのシングルス・バーの、華やきの中に漂う寂寥感を思い出した。満たされていなくても、やはり人は人を求めるのだろうか。

午後七時を回った。道に迷ったようだ。どうせ、それほど広いところではない。走っていれば、どこかに出るだろう。

信号のところ、若い連中を五、六人見つけた。話しかけると、マルボロのハードパッケージを、十マルクで売ってくれと言う。西ドイツマルクとは一対一のレートだから、八百円ほどで売れと言っていることになる。よほど珍重されているのか。理由を訊いたが、よく理解できなかつた。

十本ほど入ったパッケージをひとつやると、彼らは急に人懐っこくなつた。

「音楽を聴けるとことか、ディスコとか、ここにやないのか？」

「あるよ」

会話は心もとない。ひとつを理解するのに、とんでもなく手間がかかる。

「どうも、『デビッド・ボウイ』ってディスコがあるらしいね、秋山さん」

「らしいな」

二人でそういう結論に達し、場所を訊いたがよくわからなかつた。何枚か写真を撮って、彼らとは別れた。

いつの間にか、ブランデンブルク門に出た。

門は国境の真中にあり、西から見ると後ろむきで、こちらから見ると正面である。門の二、三百メートル手前に柵があり、そこからさきは立入禁止だつた。

人が集まっている。観光客には見えないが、みんな門を熱心に眺めているようだ。柵を背にして立ち、集まっている人間の顔を眺めている方が面白かつた。三々五々、寄り添い、た



だじつとなにかを待っているように見えた。門のむこうから、自由でもやってくるのか。そんな冗談を秋山と交わした。

肩を叩かれた。

さつきマルボロをやった連中だ。また、デビッド・ボウイを連発しはじめる。

「どうも、ディスクの名前じゃないみたいだ」

「コンサートって言っていないか？」

「だけど、ボウイがブランデンブルク門でコンサート、やるわけねえよな」

秋山も、首をひねっている。ひとりが、門の方を指さした。あつ、と私と秋山は顔を見合わせた。

「西ベルリンで、ボウイのコンサート。それなら考えられるぜ、秋山さん」

「野外だったら、風に乗ってここへも聴こえてくるかもしれない。情報は、ラジオで攪めるだろうしな。当然、西の電波は流れてきてるんだから」

「生のデビッド・ボウイか。こいつは驚いた」

耳を澄ましていると、かすかな音楽が国境のむこうから流れてくるのが聴こえた。

「途切れ途切れのボウイを聴くために、こんなに若い連中が集まっていたのか」

「羊みたいな表情で、大人しく柵のこつち側で待ってるわけだ。撮ったら、秋山さん」

「キャプションで、かなり長い説明をしなきゃならねえ写真だぞ。文字に置き換えられる写